

## パプアニューギニアにおける民族考古学的調査（13）

高橋龍三郎・根岸洋・平原信崇

はじめに

本稿は二〇一五年三月に実施したパプアニューギニア、イーストケープのトパ地区、ケヒララ地区の民族考古学的調査の報告である。

筆者らは、セピツク川中流域クウォマ族の素焼き土器の生産に係る民族誌調査と、パプアニューギニア東端分のミルンベイ州、イーストケープにおける家庭的土器生産に関する調査研究を継続してきた。

前者においては、曲線文様や人面表現など豊かな文様を施文する土器（アパウ、ワサウ、アウマル）などの製作が、基本的にヤム儀礼などの使われる儀礼的用具であるこ

と、したがってその製作に当たっては儀礼と直接に関わる階層の成員（ノグイ階層）の成員の内、特定克蘭（クラワ・克蘭）の男しか製作を許されない、という特殊な事情を垣間見ることができた（高橋ほか二〇一二、高橋ほか二〇一三）。特定の人物が土器を使って儀礼を執行するのであるから、製作に当たっては土器の使用時に備えて文様などに予め意味を込めて製作しておくことも考えられている。

後者のイーストケープの事例では、ギルマやハバヤという器種が日常の煮炊きに使用されるものの、他の器種などは葬送儀礼や呪術などとの関わりの中で製作使用されたらしいことが推測されてきた。現在、私たちが尋ねても実質的な使用方法がわからないピドラなどは、特殊な製作方法

と器形、裝飾内容をもっている。私たちが減多に目にする  
ことがない特殊な機会に使用される可能性もある。例え  
ば、葬式や特別な儀礼などは、可能性が最も高いと考えら  
れる。セピック川流域と同様に、この地域でも製作者にそ  
のような動機があるのかどうか重要な課題である。もし  
同様の結果が得られたならば、パプアニューギニアの各所  
において、土器製作に当たって、日常を超えて超自然的存  
在を前提にした製作が行われていることを示している。

筆者らは、この地域の女性土器製作者のうち、一人の卓  
越した技術を持つ老女（D女史）がおり、彼女が「土器型  
式を変えることができるのは私だ」と豪語する機会に遭遇  
した（高橋ほか二〇〇八）。周囲から聞き取り調査を行う  
うちに、彼女は単に土器づくりの技術が優れているだけで  
なく、他に彼女が持つ世界観なり宗教観などが他の誰より  
も造詣深く、その点において精神世界の社会的リーダーで  
はないのか、という可能性について思慮してきた。土器型  
式を変革するのが彼女で、他の女性たちは唯々諾々とそれ  
に従うのは、技術面を越えた何者かが、その動機になっ  
ている可能性を考慮したからである。

とはいえ、彼女の日常的なやり取りや彼女を取り巻く  
人々の会話の中から、それを窺い知ることは出来なかつ  
た。土器の文様や器種に宗教的な特別な意味を持たせるこ

とができるのが彼女だけであるとするなら、昔の土器使用  
法においては、今日の使用法からは直接うかがい知れない  
特殊な機能があつたかもしれないのである。今回の調査で  
は精神世界を窺うことができる配石遺構と立石に注目し、  
併せて死後の世界と関連する山岳信仰について若干の知見  
を得た。

今回の調査は二〇一五年八月に実施する予定の本格的調  
査の準備的な体制を整えるためのものである。

（高橋龍三郎）

## 1. 二〇一五年三月調査の概要

二〇一五年三月調査は、三月七日から同月一四日にか  
けてパプアニューギニアのミルンベイ州トパミッション<sup>①</sup>に  
実施した（表1）。調査地はニューギニア島の東端部に位  
置し、ミルンベイ州の州都アロタウから陸路で約二時間の  
距離にある（図1）。当地は東でケヘララミッション<sup>②</sup>に接  
しており、両域は行政的に区分されているものの土器づく  
りや親族組織などがほぼ共通している。

筆者らは二〇〇六年八月のケヘララ・トパの調査を皮切  
りに、本地域において二〇〇七年、二〇〇八年、二〇一〇  
年、二〇一二年、二〇一三年、と継続的に調査を実施して

表 1 調査行程

| 日程       | 行程・調査内容   | 調査地                            |
|----------|---|--------------------------------|
| 3月7日(土)  | 【空路】成田空港⇒ジャクソン国際空港(ポートモレスビー)  | —                              |
| 3月8日(日)  | 【空路】ジャクソン国際空港⇒ガーニー空港(アロタウ)  | —                              |
| 3月9日(月)  | ミルンベイ州政府のオフィスにて調査許可証の申請・発行、および昨年度調査報告書の提出<br>アロタウマーケットにて食料等の購入<br>【陸路】アロタウ⇒ダワタイ村(トバミッション) | —                              |
| 3月10日(火) | 土器データの収集、土器づくりに関する聞き取り調査<br>親族組織に関する聞き取り調査、立石および配石に関する聞き取り調査                              | クワピクワピヤ村、ムトゥウフ村<br>シクワラ村、ヤワラタ村 |
| 3月11日(水) | 土器データの収集、土器づくりに関する聞き取り調査<br>立石および配石に関する聞き取り調査   | ワダガウ村、<br>ウェスト・ベトゥトゥウ村         |
| 3月12日(木) | 土器づくりに関する聞き取り調査<br>親族組織に関する聞き取り調査、立石および配石に関する聞き取り調査                                       | イースト・ベトゥトゥウ村                   |
| 3月13日(金) | 【陸路】ダワタイ村⇒アロタウ<br>【空路】アロタウ⇒ポートモレスビー   | —                              |
| 3月14日(土) | 【空路】ジャクソン国際空港⇒成田空港  | —                              |

きた。これにより、両域において製作または搬入された三〇〇点あまりの土器とその所有者を含む約四十名の製作者に関するデータを収集している。加えて実見による製作技法および工程の観察、GPSと簡易測距儀を用いた集落および構造物の記録、各集落のファミリーの作成とクランやサブクラン、トーテムといった親族構造、トレハ(*tolaha*) という葬送儀礼、などに関する基礎データを収集してきたことはこれまで報告してきたとおりである(高橋ほか二〇〇八など)。本調査はこれまで十分に調査し得なかった諸点を補填するために計画されたが、一週間という時間的制約もあることから、製作者の婚姻や転居歴と集落内に点在する立石・配石に焦点を絞って聞き取りを実施した。(平原信崇)

## 2. 製作者の婚姻に関する調査

当域の婚姻は自身が属す親族集団外部に配偶者を求める外婚であり、一般に同じ親族集団の成員の通婚は避けられている。当域の親族集団は母方の系譜にもとづくクラン(*guguni*)・オリジナルファミリー(*original family*)・サブクラン(*sub clan*)という構造をなしている(高橋ほか二〇一四)。クランは明確に系譜を辿ることはできないが

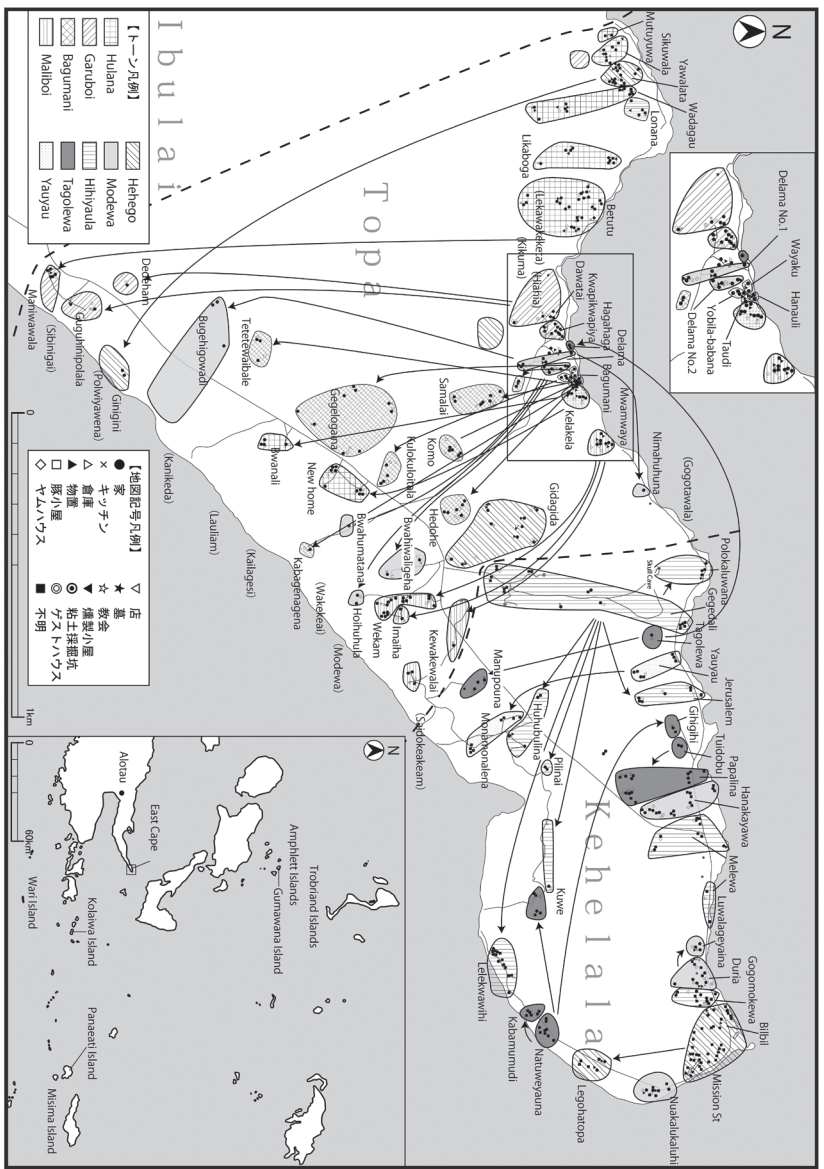


図 1 調査対象地の位置

鳥・魚・蛇・植物の四種のトーテムで相互に成員であることを認識している母系出自集団であり、その一方でオリジナルファミリーとサブクランは成員同士が明確に系譜を辿ることができる点でリネージ (lineage) に近い出自集団である。オリジナルファミリーはある共通のサブクランを起源とする系譜関係が明確な複数のサブクランを包括する出自集団であり、サブクランの拡大とさらなる分節によって形成されたものと推察される。すべてのクランにオリジナルファミリーが存在するわけではないため、サブクランのみに分節されるクランもあれば、サブクランとオリジナルファミリーに分節されるクランもある。同じクランに属しながらも婚姻を結んでいるケースが少数ながら見受けられるのに対し、同じオリジナルファミリー・サブクラン内部で婚姻が見受けられないのは、その系譜関係が明確であるからであろう。

ケヘララ・トバ両域における製作者の通婚圏は、イーストケープ内にとどまらずヤバム島 (Tabam Island) やパヒレレ島 (Pahilele Island) をはじめワリ島 (Wari Island) やミシマ島 (Misima Island) などの周辺島嶼部にも広がっているが、ケヘララ出身の製作者はケヘララ内で、またトバ出身の製作者はトバ内で婚姻を結ぶ傾向が指摘される。

結婚後の夫婦の居住地は、「特定の場合を占有・居住する権利、特定の場合で農耕・漁労を行う権利」(高橋ほか二〇〇九) が母系制のもと女性を通じて継承されていくため、夫が妻方の土地ないし妻の母方の土地に移り住むことが一般的である。結婚に際して妻の出生集落内の一角に新居を構えるケースが圧倒的に多いが、稀に妻の生家に夫が移り住むケースや妻のクランが所有する他集落に夫婦そろって移り住むケース、夫の土地へ妻が移り住むケースなどもあつて多様性に富んでいる。そのほか全く関係のない土地に移り住むケースや居住地を転々とするケースがあるが、これらは夫が牧師や教師の場合に限られるごく例外的なものである。

前記のような従前調査の知見に加え、近年の調査では結婚後に夫婦で妻方の土地へ移り住むものの、その何年か後に夫婦そろって夫方の土地へと居を移すという転居のあり方が認められた。このような転居歴についてはこれまで詳しく聞き取っていなかったが、製作者の転居は製作技術保持者どうしの交流をもたらし機会となることや、とくに製作技術が異なる他の生産地への転居は異系統の技術を習得する好機となる点で重要である。このため今次調査では、二〇一五年八月調査の予備調査として、クワピクワピヤ (Kwapikwapiya) 、シクワラ (Sikwala) 、ヤワ

ラタ (Yawalata) 、ワダガウ (Wadagan) 、イースト・ベ  
トゥトゥウ (East Beturu) 、ウエスト・ベトゥトゥウ (West  
Beturu) の六村に住む七名の製作者をインフォーマント  
として聞き取りを行った。

聞き取り調査の結果、結婚後も自身の出生地から一度も  
転居していない製作者が三名、夫の出生地へと転居したこ  
とがある製作者が三名、残りの一名の製作者は結婚後に転  
居したわけではなく結婚時に夫方の土地へ移り住んだケー  
スであった。当初の想定よりも妻方に居住した後に夫方に  
転居する事例が多い結果となった。これらの製作者はいず  
れも五十〜六十歳代であるため、転居の有無は世代の差異  
とは考えにくい。ここから、婚後に妻方の土地で永住する  
と固定的に考えるよりも、むしろ流動的に夫方の土地へと  
転居すると想定するほうが妥当かもしれない。

夫方の土地へ転居した三名のうち、バグマニ村 (Buginani)  
のハナウリ (Hanauhi) 出身のA氏は、ワダガウ村出身の  
男性と結婚後バグマニ村で暮らしていたが、二〇〇一年に  
ワダガウ村へと転居し、それ以降同村で暮らしているとい  
う。またヤワラタ村出身のL氏は、トパの西に位置するイ  
ブライミツシヨンのムトゥユワ村 (Mutuywa) 出身の男  
性と結婚後ヤワラタ村で暮らしていたが、その後ムトゥ  
ユワ村で五〜六年間暮らし、さらに現在はヤワラタ村に

戻っている。さらにシクワラ村出身のR氏は、ガロワヒ  
(Garowahi) 出身の男性と結婚しており、シクワラ村で暮  
らしながらも、数ヶ月ほどガロワヒへと転居し、その後シ  
クワラ村へと戻るといふ転居を繰り返しているという。  
これら三名の事例から、妻方で居住した後に夫方へ転居す  
る様態には、①夫方へ転居しそこで住み続ける、②夫方へ  
転居しさらに妻方へと転居する、③妻方と夫方を行き来す  
る、の三種が認められる。以上のような転居のあり方にと  
のくらい流動性があるのかについては、今次調査で聞き取  
り得なかった他の製作者の転居歴についてさらに調査する  
必要がある。

前記の三名の製作者のうち、R氏はガロワヒに粘土がな  
いため土器をつくらなかったというが、A氏とL氏は転居  
先で土器製作をおこなっていたという。とくに注目すべき  
はイブライのムトゥユワに転居したL氏である。これまで  
当地の土器づくりに関する民族誌はなく、ケヘララ・トパ  
において「イブライには土器製作者はいない」と聞き取っ  
ていたこともあって、その実態については不明であった。  
しかしながら、L氏が「イブライにも多くの製作者がい  
る」と明言したことや、「イブライの土器 (Ibainan)」を  
模倣して製作したという土器を実見できたことから（写  
真1）、当地において土器づくりがおこなわれていること



※縮尺不同

写真1 L氏製作の土器 (1:ギルマ, 2:ハバヤ, 3:模倣土器)

はほぼ間違いないと考える。今次調査でL氏製作の土器を三点収集したが(写真1)、1は主にトパに分布するギルマ(*gilma*)、2はイーストケープで通常のハバヤ(*habaya*)である。そして3

が「イブライの土器(Iblai nzu)」を模倣して製作したという土器である。3は、底部から胴部にかけて大きく開き、屈曲して口縁にかけて内湾する器形を呈し、屈曲部には刺突列、口縁部には節の細かい櫛歯状工具で逆「く」字状の文様が水平方向に連ねている。器高が低く胴部最大径が大きい点に器形の特徴を認める。イーストケープの土器に類例を求めると、胴部から口縁にかけて内湾するグマシラ(*gumashira*)やウオゴ・カラカラ・ププ(*wogo-karakara-pupu*)に類似するが(図2)、明らかに模倣土器は器高が低い。表面観察

からは両例とも類似する製作技術で製作されていると推察されるが、本例がイブライに特有の器種であるのかどうかは当地の調査をおこなって類例を収集した後に判断したい。

最後に、イブライの土器づくりについて、徒歩で行き来できない隣接地域にて土器づくりがおこなわれているにも関わらずなぜケヘララ・トパ両域の製作者はそれをほとんど認識していないのかということが疑問に残る。ケヘララトパ間の通婚が比較的多く認められる一方で、ケヘラライブライ間、トバイブライ間の通婚がほとんど認められないことと無関係ではないと推察されるが、イブライの親族組織の確認を含め当地で調査をおこなう必要がある。(平原信崇)

### 3. 立石・配石についての調査

#### (1) はじめに

本項では、二〇一五年三月に行った立石・配石について



※縮尺不同

図2 イーストケープのグマシラ(左)とウオゴ・カラカラ・ププ(右)



の調査とその考察について記載する。これら岩石を用いた構造物については、先行研究からマッシム地域に広く存在することを確認し、また既往調査時に幾つかの村落においてたびたび見聞きした結果、両者は住民から意識的に区別されていることが分かっていった。さらに、これまで調査チームが行った親族調査の成果（高橋ほか二〇一五）によっても誰が構築したか特定することができなかったため、立石・配石は現在遡り得る記憶よりも前に構築された言わば考古学的「遺構」となっていることが判明している。その由来や本来の機能等を知る人が殆どいないものにも関わらず、現代でも壊されたり、移動されたりすることなく保護されていること、石そのものにトーテムの名称が付けられている事例（高橋ほか二〇〇九・七九）等から、各村落やクランの出自を推定する上で重要な意味を持つものと予想されていた。

(2) 調査報告  
①名称と意味

最初に、立石・配石のタワラ (Tawala) 語名称と意味につ

いて触れておきたい（表2）。

立石は単独・複数に関わらず、ガイマ (gaima) と総称される。これは石一般を意味する名詞でもあるが、立石には本来固有の名称が付けられたものらしい。例えば、筆者等がかつてヤバム (Yabam) 島で調査を行った、楕円形配石に囲まれたヤラシ石 (Yalasi Stone)（高橋ほか二〇〇八・八五—八六）の場合、“gaima Yalasi”と呼ばれて通常の石とは区別されている。配石はガハナ (gahana) と総称される。特に今回調査を行ったような環状配石を指すが、環状配石を含む区域は古い墓地 (meyagai) としてみなされている場合がある。他方、メヤガイ (meyagai) という名詞は「墓地」のほか「村落」も意味する (Ezard 1997)。もっとも本名詞は、キリスト教化が進んだ今日ではあまり使われない古語の一つと思われる。

今回の調査において、ベトゥトゥウ村

表2 タワラ語による名称一覧

|         |                                       |
|---------|---------------------------------------|
| gaima   | 石一般を意味するが、特に立石を指す。                    |
| gahana  | 配石一般を意味する。特に環状配石を指すが、列状配石等も含まれる。      |
| meyagai | 村落の意味。聞き取り調査では墓地、gahanaがある区域を指す場合がある。 |



の古い歴史について調査を行った際に聞き取ることができた修飾節、「meyagai bada(-na)」は「戦争に勝利することから、メヤガイは祖先の霊力や偉大さを示すという感触を得た。どうやらメヤガイという名詞は直接的には墓地を指すが、霊力・偉大な祖先(男性)・古い村落といったイメージを伴うものらしい。従って、しばしば墓地と同一視される環状配石 (gahana) も、同様の意味合いで語られる名詞であると考えられる。

②立石・配石の立地と特徴

【ヤワラタ村】

本村落にある家屋は、海岸沿いにある数棟を除き、内陸部におよそ東西二箇所のみとまりに分かれて分布している。東部には、周囲を家屋に囲まれた広場状の区域の中心に、斜位に据えられた立石 (gaima) 一基の先端部を確認できた。暗緑色を呈する片岩だと思われるこの石は、露出部分で約三〇cm長、地中に埋まっている部分を想定すれば大形立石とみて良いであろう。本立石は周辺家屋からも見える位置にあり、また訪問者からも見えやすい位置にあると言える。立石の位置からみて奥まった区域に、短め(長さ一〇〜二〇cm程度)の扁平状立石十数本を楕円形に配置

表3 トバミッションにおける立石・配石の調査成果 (2015年3月)

| 村落名      | 名称[種類]           | 立地          | 特徴  |
|----------|------------------|-------------|---|
| Yawalata | gahana<br>[環状配石] | 居住域         | 立石を楕円形に配置し、内部に平坦面を持つ石が充填される。構成する石の一つは、インフォーマント(女性)の曾祖父が Duau 島の Wakayuna から運んできたものだという。 |
|          | gaima<br>[立石]    | 居住域<br>(広場) | ・gaima は複数基あったが、そのうち2本を抜いて gahana に移設したと伝えられる。<br>・先祖が Normanby 島の Lauhina から持ってきたという。  |
| Betutu   | gahana<br>[環状配石] | 居住域<br>縁辺部  | 墓地であり、インフォーマント(70歳代)の曾祖母、高祖母がここに葬られたという。食人の風習があった時代に作られたという。                            |
|          | meyagai          | 縁辺部         | マウンド状をなし、5基の立石を周囲に配置。幼児の墓地。   |

し、内部に角礫・平坦面を持つ石・立石を不規則に充填した環状配石 (*gahana*) を一基確認できた。配石全体の長径は約八〇cmである。充填された石の中には使用面を持つ礫石器が含まれている可能性があるが判然としない。インフォーマント (女性) の祖父によれば、環状配石の方が古く、その後で立石が立てられたという言い伝えがある。また、本来立石は数本 (おそらくは三本) あり、その中から二本を抜いて環状配石の立石として移設したという。これらの石には特定の名称は知られておらず、また機能についての言い伝えは知らないとのことであった。

#### 【ベトゥトゥ村】

本村落は海岸から内陸にかけて立地しており、数箇所の家屋のまとまりが分布している。その内の一つにおいて、土器製作者である女性から配石 (*gahana*) についての聞き取り調査を行ったところ、居住域からやや離れた斜面上において楕円形 (直径約四m) の配石を二基確認できた。表面には、現代よりも古そうなタイプの土器破片の散布が見られた。インフォーマントはこれらを墓地 (*mevagai*) だと認識しており、彼女の曾祖母、高祖母が埋葬された一方、彼女の母・祖母は、キリスト教の墓地に埋葬されたといふ。

このほか、低いマウンド (地表面から約八〇cm) を確認した。これらも墓地 (*mevagai*) と呼ばれているが、幼児を埋葬していた古い墓地だと言うことである。中心部に大形の立石一基が、周囲にも数基の立石が立てられていた。

#### (3) 先行研究との比較

先行研究との比較から、ヤワラタ村・ベトゥトゥ村に見られた立石・配石について考察を試みたい。イーストケープの所在する半島から西に約七〇〜八〇km離れたニューギニア本島北岸の Goodenough 湾沿岸域、Milne 湾を挟んで南側沿岸域にあるワガワガ (*Wagawaga*)、本島南岸域に近い小島である Rogea 島には、二〇世紀初頭から環状配石が報告されている (表4)。これらはガハナ (*gahana*)、もしくはボラボラ (*bolabola*)、バル (*baruvalu*) と呼ばれ、規模 (直径約四〜六m)、内部に板状の立石を複数基持つ点、男性の集会場として用いられていた点において多くが類似している。環状列石に女性が近づくことはなく、また立石は父系で引き継がれるものと記されていることから、男性によって継承されるものであった蓋然性が高い。一方、祖先の墓地として認識されている事例は一例のみ (*Wedau*) に留まるものの、被葬者や所有者についての情報は記録されていない。

表4 ニューギニア島本島南東部における環状配石の先行研究

| 地域[村落名]                          | 名称[種類]              | 特徴  | 引用文献                            |
|----------------------------------|---------------------|---|---------------------------------|
| Goodenough 湾<br>沿岸域<br>[Taupota] | gahana<br>[環状配石]    | ・小～中形サイズの石を集めて円形を形作り、内側に大形の板状石を複数本立てる。内側には石を配置しない。<br>・中心部に置かれた水を満たした浅い土器は、gahana を頻りに訪れる男性が鏡として用いたと推定された。  | Seligmann<br>(1910):465         |
| Goodenough 湾<br>沿岸域<br>[Wedau]   | -<br>[環状配石]         | クランに属する墓地とされる 1 基の環状配石があり、先祖が埋葬されたと伝わる。直径約 5m で、高さ 16～58cm の板状石を立石として円形に配置。   | Egloff<br>(1970):<br>152-153    |
| Goodenough 湾<br>沿岸域<br>[Wamira]  | bolabola<br>[環状配石]  | ・環状配石および列状配石を指す。<br>・食人の風習に関わる事例が記録されているが、20 世紀初頭、既に昔の風習の一つと考えられており、男性の集会場、議論する場としてのみ用いられていた。<br>・直径 16 フィート (約 4.9m) の環状配石。<br>・直立する石は家族の財産であり、所有者たる男性が死去すると兄弟、そして姉妹の息子に引き継がれる。<br>・各立石には名前があったと言われており、その内一つにはトーテムである Garuboi という名称がある。<br>・かつて女性が内部に入ることはなかった。<br>・bolabola の中心部には本来、noma と呼ばれる大形で浅めの土器が置かれていた。 | Seligmann<br>(1910):465-<br>466 |
|                                  | -<br>[環状配石]         | 長径約 6m・短径約 4m で、高さ 30～93cm の板状石を立石として楕円形に配置。内部に平坦石を敷き詰める。   | Egloff<br>(1970):152            |
| Goodenough 湾<br>沿岸域<br>[Garuwai] | -<br>[環状配石]         | ・それぞれに名称を持つ 4 基の環状配石があり、Wedau にあるものと類似した構造をなし直径は 4～5m である。<br>・旧集落は配石群の近くにあったとされ、先祖が集会場として用いていた。表土で土器片が確認された。   | Egloff<br>(1970):153            |
| Milne 湾沿岸<br>[Wagawaga]          | gahana<br>[環状配石]    | ・食人の風習に関わるものと、関わらないものの 2 種類。<br>・クランに属する男性によって構築された集会場。   | Seligmann<br>(1910):464         |
| 本島南岸域<br>[Rogea 島]               | baru/balu<br>[環状配石] | ・大形あるいは小形石が集められた構造物。<br>・男性がしゃがんだり、おしゃべりをしたりする場所。<br>・女性が近づくことはなかった。  | Seligmann<br>(1910):<br>463-464 |

以上述べた事例と今回の調査成果を比較してみると、環状列石としての構造は類似しているものの非常に規模が小さい。また先行研究に見られた「男性の集会場」としての機能や、所有権・継承権についても今回は調査が及ばなかった。なお先行研究では、配石の機能が墓地だと記録されているのは一例のみであった。その意味で、ベトゥトゥウ村の環状配石が *mevagai*（祖先の女性が埋葬された）（墓地）だという聞き取り成果は示唆に富む。土地所有権が母系で継承されるイーストケープにおいて、環状配石はどのように機能しているのか、親族組織とどのように関連するかに追加調査を行いたい。さらに先行研究には、環状配石とは別個に存在する立石 (*qaina*) についての記述が見つけられなかった。今後島嶼部まで比較対象を広げつつ、石材・採集地まで含めた調査を行う予定である。

（根岸洋）

#### 4. ブエブエツン山をめぐる精神世界について

前章で根岸が述べたように、筆者らは各サブ克蘭の家々を巡るうちに、庭先あるいは家屋から離れた奥まった場所に細長い石柱状の石棒（ガイマ）が樹立し



写真2 ヤワラタ村のガイマ



写真3 ヤワラタ村のガハナ



写真4 ベトゥトゥウ村のガハナ



写真5 ベトゥトゥウ村のガハナに  
散布する土器片

ていることに気が付いていた。時には屋敷内にあるマウンド状の地彫れの上に二、三本立つ例（ヤワラタ）や木の根元にまとめて数本が立つ例（ヤワラタ）もあった。明らかに現代社会の中で生き続けていることを示す例として、現在の墓石と一緒にコンクリートで根元を固められて樹立する例もあった（ベッツ）。また人を招き入れる庭先の広場に大きな石柱が二、三本ある場合もあり、日常生活の上で大いなる邪魔物として不便を感じざるを得ないこともあった。なぜ抜き取らないのか、理解に苦しむこともある。多くの場合、そのサブ克蘭の墓域と関係して、その近辺に立てられることが多い。

彼らに、「その石は何か」と問えば、大方の回答は「知らない」とか「遠い先祖（先住民）が他所から持ち込んだもので、自分たちは知らない」というものであった。あたかもそれを知っていること、口外することが憚れるかのような物言いであった。

そのような多くの家々の庭先で遭遇する同様のリアクションから、却って人々の間には意図的に言及を避けざるを得ない共通の根拠があるに違いないという確信を持つに至った。その共通の根拠とは一体何であろうか。そして、その理由こそが、この地域の伝統社会の中にひっそりと根付いている、外来者には容易に接近を許さない領域の事柄

であるに違いない。

イーストケープの飛び地であるイヤバム島で、筆者らが最初に遭遇した長さ二m近い「ヤラシストーン」は、漂着伝承が残り、古代の遺物であることが窺われた（高橋ほか二〇〇七）。しかし、それは今回報告するガハナやガイマと密接な関係にあることが窺われるのである。

それでは、石柱や石囲いが直接的に関係した習俗や慣習とはどのようなものであつたらうか。その課題は、この地域の社会の多くの人々の世界観と関連し、イデオロギーを形成する上で大変重要な働きをしたはずである。しかし、これについては詳しい内容を聞き取っていないので、詳述は望むべくもないが、その糸口らしき部分には辿り付くことができた。それは、その石造施設がいずれも墓などと関連して構築されることの意味である。葬送儀礼や死後の靈魂の在り方や靈魂の行き場など「靈魂観念」と密接に関係していると推測される。

この地域の死者の靈魂などの行き場としてよく語られるのは、ノルマンビー島の「ブウェブウェン山（Bwebweso Mountain）」である。晴れた日には、本島から西方にノルマンビー島の島影が明瞭に視認され、その中にブウェブウェン山の峰がくっきりと見える。その麓のクラダ村からはイーストケープにも婚入者が多くあり、古くから通婚が

行われていたことは聞き取り調査でも知られていた。ブウェブエソ山はR.F.フォーチュンの名著『ドブの魔術師 (Sorcerers of Dobu)』にも、一帯の死者の靈魂に行き着く場所として記録されている (R.F. Fortune 1932)。同書によると、ブウェブエソ山に集まった多くの靈魂は、傷ついたものであれば山に棲むヘビによって食べられてしまふと信じられていたという。ガハナやガイマは、当地域の墓や先祖と関わり、男らしさや勇猛なる意識の涵養と関わる一方で、地域の人々の靈魂観念とも関係し、当地域の世界観と関係するのである。石棒がブウェブエソ山のヘビと関連し、また男たちの逞しさや、未開社会の靈魂信仰と関係性を持つことは十分に考えなくてはならない。

(高橋龍三郎)

### おわりに

今回の調査は、女性土器製作者のイデオロギーや世界観の中に、当地方の宗教思想や在地的な葬送儀礼と靈魂観などが重要な事項として含まれているのではないかと、という問いから開始されたものである。土器型式がなぜ一人の有力な製作者によって変革できるのか、またその他の多くの女性たちが彼女の変革を受け入れることの理由を、土器製

作技術とは別の視点から考え直す必要が生じたからである。またその世界観を構成する宗教観や儀礼、祭祀に関する考え方を知る必要が生じたからである。宗教観としては、特にイーストケープと海を挟んで対面に位置するノルマンビー島のドブ地域などが重要な参照地域で、フォーチュンが記録したドブの民族誌に登場するブウェブエソ山の死靈信仰などは、石柱などと関連すると考えられる。またかつてギルマやピドラ等の器種が、葬送儀礼と密接な関係で製作されたらしいことを考えると、それを製作する女性土器製作者の世界観が、それらと全く無関係に存在したとは考えられないからである。土器製作の主導的立場に立つ一人の女性は、母系制社会の当地域において、やはり地域の宗教観念においてもリーダーではないのであろうか。筆者らが辿り付いた仮説の現状は以上の通りである。

今から百数十年前のキリスト教宣教師団が到来する前、この地域は鉄器すら知らず、物質的にも精神的にも旧習のもとに日常が繰り返されていた。石柱や石囲いなどは、まさにその頃に活発に活用されたものであろう。今回の調査により課題は以下のように集約できるであろう。

(1) 現在では近代化の大きな流れの中で失われつつある過去の世界観を、石柱や石囲いなどから、どうやって復元することができるか。



(2) 失われつつあるも、現代のイーストケープ地方の社会において命脈を保つイデオロギーはいかなるものか。また、それがどのような局面と関連し、どのような社会的機会と関係して保持されるのであろうか。

(3) そのような世界観は、母系制社会の中で、女性たちの世界観とどのように関連するのであろうか。土器製作に関わる女性たちと、その世界観は如何なる関係性をもつのか。

ガイマヤガハナなどの石造遺構が、彼らが言う通り遠い先祖との関わりにおいて、過去に構築され機能した機会を復元する必要があるが、それらがいつしか生活の表舞台から後退し、意識の上からも徐々に背後に回るようになったのは歴史的過程がある。当地域の近代化へ道のりと関係する。大きな契機は最低二回あったと推定される。

キリスト教宣教師がイーストケープに到着し布教を始めたのが一八〇〇年代で、以後、ケヒラヤトバに教会が建てられ、日常の布教を通じて、地域の伝統的な習俗に基づく様々な行事や儀礼、祭祀、呪術、魔術などを改めるように教示されたのである。かつての集会所などの場所に教会が建てられたのも、そのような近代化への道のりの一環であった。しかし、彼らの信仰や儀礼、祭祀、他の習俗は、

すべてキリスト教的な西欧の世界観に置き換えられたかというところではなく、キリスト教を新たな文化として受容する片方で、古い習俗がそのまま維持され社会の裏側に潜んでしまったのである。これが第一の契機であった。

近年、アロタウを中心にして周辺地域に貨幣経済が普及し、一九七〇年代の独立以降、新たな国家教育や衛生的な生活が浸透する過程で、旧来の慣習は忘れられて片隅に追いやられる傾向にあり、社会組織の中にも近代化に向けた積極的な取組みも功を奏しつつある。政府による近代的な政策も伝統的な世界観にも大きな影響を与えているといつてよい。これが第二の契機であらう。

石柱や石囲いは、そのような伝統的世界観の中で大きな意味を持ったものであろうが、キリスト教の大きな影響のもとに変革され、さらに近代化の流れの中で変革され、それらとは相容れぬものとして社会の背後に隠れ、より一層、深みの中に埋没したのであろう。彼らの口承伝承から屹立する石柱のことが脱落して、人口に膾炙されなくなつた背景には、そのような時代の変革があつたと思われる。

今後、当地域の土器製作に当たって、地域の宗教観念や世界観が、どのように製作者の技術や製作システムに影響を与えているかについて、調査を進める必要がある。

今回の調査に当たっては日本学術振興会の科学研究費



挑戦的萌芽研究（研究代表者・高橋龍三郎、課題番号 26560139）の助成および鹿島学術振興財団研究助成費、科学研究費補助金若手研究（B）（研究代表者・根岸洋、課題番号 26770267）、二〇一四年度特定課題研究助成費（研究代表者・平原信崇、課題番号 2014S-179）の支援を受けたことを明記する。（高橋龍三郎）

## 註

- (1) 以下「トパ」と略記する。  
 (2) 以下「ケヘララ」と略記する。  
 (3) 以下「イブライ」と略記する。  
 (4) *bada* は男性

## 引用文献

- 高橋龍三郎・細谷葵・井出浩正・根岸洋・中門亮太二〇〇八  
 「パプア・ニューギニアにおける民族考古学的調査報告4」  
 『史観』第一五八冊、七四―九九頁、早稲田大学史学会  
 高橋龍三郎・井出浩正・根岸洋・中門亮太・根兵皇平  
 二〇〇九「パプア・ニューギニアにおける民族考古学調査  
 (五) ―ミルンバイ州トパにおける調査概報―」『史観』第  
 一六〇冊、七二―八九頁、早稲田大学史学会  
 高橋龍三郎・井出浩正・中門亮太二〇一〇「パプアニューギ

ニアにおける民族考古学調査(六)」『史観』第一六二冊、  
 七九―一〇〇頁、早稲田大学史学会

高橋龍三郎・中門亮太・平原信崇・岩井聖吾・服部智至  
 二〇一二「パプアニューギニアにおける民族考古学的調査  
 (八)」『史観』第一六六冊、八三―九九頁、早稲田大学史  
 学会

高橋龍三郎・中門亮太・平原信崇・岩井聖吾二〇一三「パ  
 プアニューギニアにおける民族考古学的調査(九)―ク  
 ウオマ族の総合的調査―」『史観』第一六八冊、一〇三―  
 一一〇頁、早稲田大学史学会

高橋龍三郎・中門亮太・平原信崇二〇一四「パプアニューギ  
 ニアにおける民族考古学的調査(一〇)」『史観』第一七〇  
 冊、九八―一二一頁、早稲田大学史学会

高橋龍三郎・中門亮太・平原信崇二〇一五「パプアニューギ  
 ニアにおける民族考古学的調査(一一)」『史観』第一七二  
 冊、八二―一〇三頁、早稲田大学史学会

Egloff, B.J. 1970 The Rock Carvings and Stone Groups of  
 Goodenough Bay. *Archaeology and Physical Anthropology  
 in Oceania*. vol.5, No.2, pp 147-156.

Ezard, B. 1997 *A Grammar of Tawala: an Austronesian  
 Language of the Milne Bay Area, Papua New Guinea*.  
 Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian

Studies, The Australian National University.  
Fortune, R.F. 1932 *Sorcerers of Dobu: The Social Anthropology  
of the Dobu Islander of the Western Pacific*  
Seligmann, C.G. 1910 *The Melanesian of British New Guinea*.  
Cambridge University Press.